

大塩沢鉱山宝来坑追探查記

大塩沢鉱山には幾つかの鉱床があり、各々、熊居沢、大銅、白沢、沢落、宝来と呼称されていたことは本論で記述している。熊居沢の位置は確定した。その後、3回の探查により、漸く宝来鉱床の位置を確定することができたので、追記する。

宝来鉱床の位置は、大正時代発行ということは百年も前のことになるだろうか、本論の図3の地形図中に、二方鳥屋（にほうとや）山頂から北西方向の標高1000m～1100mあたりに、小さな「鉱山記号」が記されている。本論での参考文献（1）の宝来鉱床の位置の記述とよく合致している。位置は大凡わかったが、さてどのようにして、この宝来鉱床に辿り着こうかと思案した。大塩沢には、熊居沢鉱床がある。既に探查済みである。他の鉱床の探查もできるはずなので、大塩沢から、二方鳥屋山頂を目指す経路が第一と考え、1回目の探查を行った。

図1中の中途な黒線が1回目の探查行である。ガーミン購入直後であり、その使用方法に慣れていなかったため、測地に失敗ばかりした。結局、探查経路を手書きで地形図に書き入れた。大塩沢の遡上は赤線とほぼ同じである。尾根筋から、沢に入って行った（そこから黒線を描いている。）のであるが、眼前に極めて落差の大きい滝に出くわしてしまった。巻き道をとるのも、急斜面なので諦め、早々に谷筋に下った次第である。何の鉱物転石も見つけられなかった。

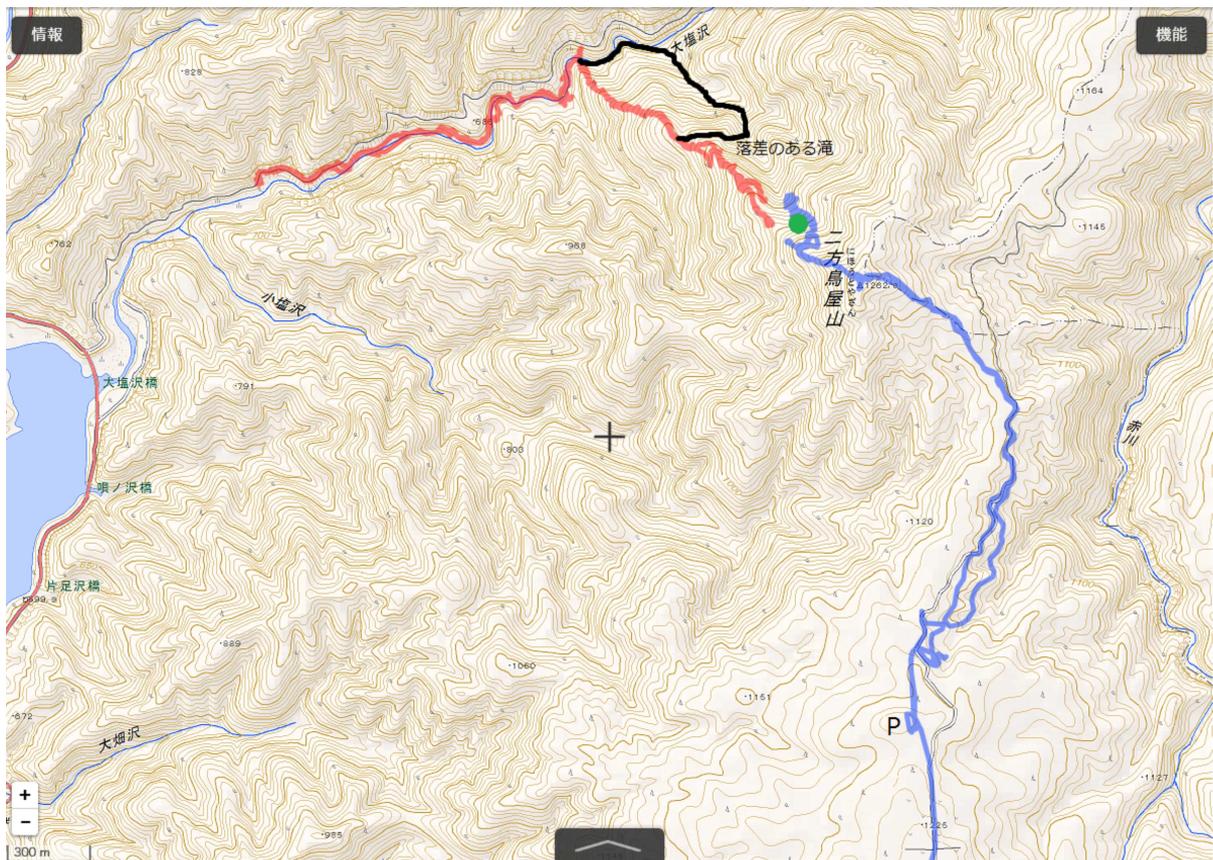


図1 黒線は1回目の探查行。五十里湖に注ぎ込む大塩沢から登った。尾根の途中から、沢に降りたが、大きな滝に出くわして、先へ進むことを諦め、谷筋に下山。赤線は2回目の探查行。1回目より尾根筋をより登り上がったが、沢側は急斜面であり、下るのは危ない。少し尾根を戻り、斜面が緩くなった部分から、谷筋を目指して下ったが、先は、やはり急斜面となっていた。退散。青線が3回目の探查行。日塩有料道路の途中から、開拓村を通過し、きぬがわ高原CCに向かい、そこから登山行となる。文字Pはカントリークラブの駐車場である。駐車場から300m位先で、経路が入り組んでいるが、確かな道を探しあぐねかねた結果である。注意点。国土地理院発行の現地形図中に記されている林道はゴルフコースで消滅してしまっている。かつ地形図中にはまだゴルフ場は記載されていない。後掲の写真中で、道の選択を教えているので、それを参考とすること。黄緑丸が宝来鉱床の坑口跡である。

図1中の赤い線が、2回目の探查経路を示している。道のない尾根筋を標高1100mあたりまで登り上がったが、肝心の左側の斜面は急斜面となり、下るのは危険であると判断し、斜面を下り、沢に行けそうな尾根の所まで下って、沢に下ろうとした。が、沢筋に辿り着く前に、斜面は次第に急斜面となってしまった。危険回避のため、沢に下ることを断念し、これまた素直にそのまま尾根に戻っ

た。尾根を更に登り上がればよいのであるが、時間が大分過ぎてしまった。次回を期して、帰還した。どうも、大塩沢ルートでは、宝来鉾床にはたどり着けないようである。機会があれば、二方鳥屋山頂経由での探査をしようと考えていた。ロシア留学から帰国すると、直ぐに、栃木地学愛好会の岩友から、宝来鉾床の探査に出かけようとの誘いがあった。即諾し、3回目の探査行に出かけた。結果、宝来鉾床跡を確定することができた。水色線がその時の経路である。中央付近の黄緑丸が宝来坑の坑口を示している。なを、赤線、黒線ともガーミンで取得した経路データ曲線を描写している。宝来鉾床への経路は次の通りである。121号を北上してきたら、龍王峡の先で日塩有料道路に入る。長い有料道路を進み、きぬがわ高原CCに向かうため、途中で左折する。この先の道路は旧会津西街道であつたらしい。鶏頂山開拓部落の中を北へ直進して行くと、ゴルフ場の中央管理施設部に行き着く。駐車場があるので、フロントに挨拶をして、駐車場の許しを貰う。ここから山行となる。これから先は、写真と共に説明を行っているので、それを参考にする。駐車場（標高1220m）から、二方鳥屋山（標高1262m）経由で宝来鉾床跡までは1時間程か。

宝来鉾床の位置が確定できたので、参考文献中の文章「・・・沢路鉾床の南東1km、二方鳥屋山の北麓にも一箇所見られ、宝来と称せられている。・・・」から逆算すると、宝来鉾床のある沢と大塩沢の出会いあたりに、沢路鉾床があるようだ。機会を作って、是非とも探査をしたい。

探査日 2015年11月17日、12月2日、2016年10月22日



図2 図1の部分拡大図。黒線と赤線は大塩沢経路の経路。共に途中で断念。青線が二方鳥屋山経路の経路。この経路で坑口に到達した。中央黄緑丸、黒「+」の位置である。頂上脇から150m余り下ることになる。尾根上には数カ所に鉄ワイヤーロープの残骸があつた。後述するホイール擬き、油缶と合わせて考えると、かつては索道で鉾石を運搬していたのかもしれない。二方鳥屋山の直ぐ東側には、江戸時代に既に開通していた「会津西街道」があつたので、鉾石の搬出には好都合であつたのかもしれない。二方鳥屋山頂近傍を探査すると、索道の痕跡が見つかるかもしれない。なを、再訪時にとるべき経路は、黒破線の経路がおすすめである。

鉾山跡写真



写真1 ゴルフ場の駐車場から、北に向かって歩いて行くと、右手に、2つの隣接した側道がある。往路には、写真中央の道を進んだが、復路は左側の道に戻って来た。要はどちらでもよいのであるが、左の方がショートカットではある。ゴルフ場は、地形図に描かれている林道を飲み込んでしまい、その代償として、写真中央の林道が開削されたようである。左側の道は、ゴルフコースに沿ったカート用道路である。



写真2 林道を北に進んできた。この所で、主林道から、左側の枝林道に入っていく。が、直ぐ消えてしまう。その先には、二方鳥屋山頂までの登山道はない。ほぼ平らな尾根斜面を登り上がっていくことになる。が、この経路をそのまま下山する時、下山道に迷うことと疑いはない。著者がテープでマーキングをしているので、それを目印にすれば、経路に迷うことはないであろう。できれば、再訪者は登って行く時、適宜にマーキングをすることを勧める。ガーミンに頼るのも良い。



写真3 二方鳥屋山頂。標高1262m。頂上は写真の如く極めてなだらか。かつ周りには立木が一杯。従って、見晴らしは良くない。立っているのが岩友。



写真4 頂上から尾根筋を降りて行くと、右手となっている谷の斜面の傾斜が次第に急となってきた。前回の探査結果も考慮して、尾根を戻り、緩くなった斜面から谷の上部に降りた。沢の上流部に入り、下っている時に見つけた、鉄製のフレーム。最初は車のタイヤのフレームかと思ったが、どうも構造的におかしい。ウインチなどのフレームと思うが。たとえば、尾根筋には、何か所かに鋼鉄のワイヤーの残骸があった。このフレームも、鉄ワイヤーロープも鉱山で使われた物であろうと考えている。ということは、この近傍に鉱山があるはず。このフレームから更に沢を下ると、油の一斗缶、油缶があった。これらも傍証か。



写真5 沢の最上部から、沢を下って、左側にあった最初の支流沢。この沢の転石として、孔雀石（鉱物写真を参照）と微小な黄銅鉱が散らばっている母岩を見つけた。この沢を登り上がり、突き当たった左側上に坑口があった。



写真6 坑口である。中に入っていない。少し離れて写真を撮ればよかったのであろうが、入口手前の空き地が狭かったので、これで我慢。周り一帯、全く手づかずのようである。じっくり観察をすればよかったのであるが、ここまでに達するのに結構時間がかかっていた。宝来鉱床を確認できたことを、探査の第一の成果とし、十分な探査は次の機会とする。

採集鉱物写真



写真7 白っぽい石英質岩上にこびり付いていた青緑色の孔雀石。他に微細な黄銅鉱の入った母岩も採集した。宝来鉱床を確定した。このあたりに鉱山施設もあったはずである。少なくとも宿泊施設が。周りの探査を行いたかったが、この坑口に辿り着くまで、何度も上り下りを繰り返した。疲労も甚だしい。帰路には、まず標高差200mを登らなければならない。現地を確認できたことを最大の成果として、直ぐに帰路についた。更なる探査は次回に期そう。